

NPO法人「水戸若手医師を育てる会」について

NPO 法人水戸若手医師を育てる会 代表 徳田 安春

卒後臨床研修の目標は基本的診療能力を身につけることである。基本的診療能力を鍛えるためには地域の中小病院における最前線での研修が望ましい。なぜなら、都会の大病院では各科のセクショナリズムにより守備範囲の狭い分野での研修をローテートすることで、最も重要な総論部分の研修が不十分となるからである。一方、都会の大病院には各科のマンパワーとリソースがそろっているという強みがある。それなら、地域の中小病院が複数相互にアライアンスを組み、教育リソースをシェアすればよいということになる。成功例としては沖縄の群星プロジェクトがある。沖縄県内における20以上の病院がアライアンスを組み、それぞれの病院の得意分野のメニューを提供し、レジデントが希望するカリキュラムでローテーションして鍛えられるような仕組みになっている。また、外国人有名指導医を招聘し、各病院を教育回診やレクチャーを行いながら回るようにしている。沖縄県ではまた最近になり、東洋最大の研修シミュレーションセンターを建設し、県全体でシェアして利用を開始した。

NPO法人「水戸若手医師を育てる会」は、水戸地区での研修病院のアライアンスが自発的に生まれ、それぞれの病院の力を結集させて、教育リソースをシェアしようというものである。2012年3月には、当NPOでお招きした、ハワイ大学医学教育学部准教授のJoshua Jacobs先生（現在、



Joshua Jacobs 先生と水戸協同病院のメンバー

シンガポール国立大学副医学部長）をお招きして、水戸地区の4病院で教育回診やレクチャーを行ってくださった。たいへん好評であった。地域の医師教育ではこのような病院間の枠組みを越えた研修病院相互のコラボレーションが重要である。今後、この若手医師を育てる会は、大リーガー級の指導医を招聘し、各研修病院で教育活動を行う予定である。将来的には、このような活動を基本モデルとして、県央県北シミュレーションセンター（仮称）設置を期待するのは著者だけではないだろう。



カンファレンスの様子



病院説明会での一コマ

「在宅医療という選択肢があることを、地域に示していきたい」～診療所医師からのメッセージ

いま、在宅医療が注目されています。結城市の診療所で在宅医療に取り組む荒井康之先生に、在宅医療の現状、やりがい、今後の取り組みなどについてお話をいただきました。

…県内の在宅医療の現状は、いかがですか？

訪問診療や訪問看護が少しずつは増えているものの、県全体に在宅医療の体制が整っているわけではない、というのが実情です。特に、24時間365日の体制で在宅医療を提供しているところは限られています。在宅医療では、病状の変化や看取りなどの対応も重要になりますから、こうした体制があると、患者さんやご家族が安心して、自宅暮らしが暮らせます。虚弱高齢者、認知症患者、がん患者、障がい者、先天異常の小児など、通院が困難な患者さんに対して、在宅医療はますます必要になってくると思います。

…在宅医療と入院医療の違いは何でしょうか？

“その人らしいこと”だと思います。病院にしていると「患者さん」という役割が主体となりますが、在宅では家庭内の役割だったり、地域の人との関わりだったり、その人らしい社会的役割が主体になります。さらに、在宅だと、家族の声が一日中聞こえ、好きな時間にテレビを観たりお風呂に入るなど、その人らしい日常に身をおけます。これが“生きがい”につながるように思っています。ただ、在宅医療が絶対だと思っているつもりもありません。人によっては、病院にいた

医療法人アスミス 生きいき診療所・ゆうき 院長

荒井 康之



方が安心で、自分らしくいられるという方もいらっしゃるし、病状から入院が良い場合もあります。そのさじ加減を、医師の立場から提案・助言しながら、患者さんと一緒に考えていくのが、在宅医の大切な仕事の一つだと考えています。

●学生実習で、在宅医療に魅了された。

…どうして在宅医療の道に進んだのですか？

受診できない人がいる、ならばこちらから診察しに出かけようと思ったのです。患者さんに対して自分に何ができるかを考えたら、自然に在宅医療に行きつきました。そのきっかけは、医学部5年生の時の、在宅医療を行う診療所での実習

です。病気を持っていても、その人らしく暮らせるように、医療の立場から支援していく—その医師の姿が魅力的でした。そして、在宅医療では、生活を支えることになりまますから、医師が患者さんの身近にいて関わりが深い。人が好きだったというのも在宅医療に魅力を感じた理由の一つかも知れません。

…診療をさせていて、日々感じることは？

在宅医療への理解が、医療者にも地域の人にも広まって欲しいと思います。在宅医療を行っている、患者さんやご家族から「在宅でこんなに医療的処置ができるとは思わなかった」「それまでの在宅医療のイメージと違った」という声を聞くことがしばしばあります。実は、医療者からも、ときどき聞きます。たとえば、がん末期を家で看ることはできないと思っている方は少なくありません。しかし、実際には、がん末期の在宅療養も、多くの場合、可能です。

●一人ひとりの患者さんを丁寧にケアしていく。

…仕事のやりがいは？

患者さんやご家族の笑顔が見られたときですね。患者さんが生きがいを持って暮らしている姿は輝いて見えます。それを医療の立場から支えられているのは嬉しいですね。在宅では、看取りの時にご家族に笑顔があることが一つの特徴だと思います。患者さんが最期までその人らしく輝いていたことに「良い人生だった」と笑顔になるのでしょうか。また、「大切な最期の時間を一緒に過ごせた」「自分たちも介護・看護

をやりきった」など、そうした達成感や満足感もあるのでしょうか。

…今後の取り組みは？

まずは、一人ひとりの患者さんを丁寧に対応していきます。そういう積み重ねから、「隣のおじいさんがすごく幸せだったから自分もそうしてほしい」というように、在宅医療が地域に浸透して欲しいです。また、在宅療養を支える仲間が増え、より質の高いケアに結びつくような地域作りをしていきたいです。地域の仲間と集まって、勉強会などを開いています。さらに、その仲間たちと市民フォーラムも計画しています。地域の人たちに、在宅療養を正しく理解してもらって、その上で、どこで療養するかを考える、そんな地域になって欲しいです。

●地域に貢献しようという仲間が増えてくれたら嬉しい

…医学生、研修医の皆さんへメッセージを。

茨城は医師不足だけに、患者さんから必要とされる場面は多いです。その分、大変なことも多いですが、やりがいも感じられます。仕事が辛くても、患者さんから「ありがとう」と言われると頑張れますね。それが、医師としての誇りだと思っています。仲間が増えてくれることは、僕たちにとっても嬉しいことです。皆さんの頑張りは、地域のためになるだけでなく、僕らの刺激にもなる。皆さんと一緒に、楽しく茨城の地域医療を支えていきたいです。

病院紹介コーナー



株式会社日立製作所ひたちなか総合病院

当院は、人口15万人を擁するひたちなか市唯一の総合病院で、地域の基幹病院として、茨城県最大の医療過疎地域を支えています。臨床研修制度発足時からスタッフ全員の協力のもと、基幹型研修指定病院として臨床研修に携わり、100人を超える多くの研修医が医療界に羽ばたいていきました。2010年7月に人間工学に基づいた先進的病院としてリニューアルオープンし、さらに2011年4月には院内に筑波大学附属病院ひたちなか社会連携教育研究センターを開設し、その臨床・研修機能は革新的進化を続けています。内科は、循環器、消化器、呼吸器、神経内科、膠原病内科、血液内科、代謝内分泌内科、腎臓内科の専門科が揃い、かつ各科が協働して、内科全体として垣根なく診療・研修しているのが特徴です。日本内科学会の教育病院の指定を受けている、県内では希少な病院です。外科も寺島秀夫教授のもとに、



垣根なく高度な診療・研修をしています。その他、小児科、麻酔科、整形外科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、皮膚科、形成外科、病理科、放射線科も研修を受け入れており、現在は16人の初期研修医（基幹型6人、筑波大学協力型6人、東京医科歯科大学協力型4人）が仲良く、かつ切磋琢磨しながら研修しています。（副院長 山内 孝義）

研修医Relay Essay リレーエッセイ

総合病院土浦協同病院
初期研修医 陶 莉沙



このエッセイを書くにあたって、わずか数ヶ月前ですが、まだ自分が学生だった頃を思い返してみました。どんな研修をしたいのか…。地元である茨城の県南に戻ることは決めていましたが、地域医療に興味のある私にとって、一次救急から三次救急まで受け入れており、多くの症例を経験できるだけでなく、予防医療からリハビリテーション医療まで包括的医療を行っている土浦協同病院はとても魅力的でした。

実際に幅広い疾患を見ることができずし、先生方の指導のもと自分から積極的に手技を行える病院で毎日充実していますが、一番印象的だったのは、コメディカルの方々の医療に対する熱心な姿勢でした。どんな研修をしたいかはもちろんですが、どんな医者になりたいかで

研修先を決めることも大切だと改めて感じました。まだまだ慣れないことも多く戸惑うことがありますが、分からないことがあればすぐに聞ける雰囲気であることも、この病院の良いところの一つだと思います。研修医同士もとても仲がよく、本当に恵まれている環境で研修ができています。

研修が始まりもうすぐ半年になりますが、自分も早く戦力になれるように頑張りたいと思います。



〈心臓カテーテル検査研修中〉

修学生サマーセミナー開催



茨城県では、8月21日～22日及び8月24日～25日に、それぞれ1泊2日の日程で修学生サマーセミナーを開催しました。このセミナーは、茨城県の修学資金制度を活用している医学生を対象に、本県の地域の医療機関の現状に触れる機会を提供し、地域を知るとともに、地域医療を担う意欲と修学生同士のコミュニケーションをはかり、県内での臨床研修の実施及び定着を促進するために今年初めて企画したものです。

1～4年生については鹿行地区において、鹿行地域の医療事情について学ぶとともに、地域に親しむことを目的として実施しました。鹿行地域の病院見学（なめがた地域総合病院、小山記念病院、神栖済生会病院から1か所選択）や、地域で活躍中の医師による講話のほか、鹿行地域ならではのプログラムとして鹿島アントラーズの

理学療法士による講話やサッカースタジアム見学、鹿島臨海工業地帯見学（エーザイ株式会社鹿島事業所）も行いました。

5～6年生については水戸地区を中心に、臨床研修に向けて具体的なイメージを形成することを目的に、2か所の臨床研修病院（水戸医療センター、水戸済生会総合病院）の見学や、地域医療支援センターによる支援体制の説明、研修医である先輩修学生との交流などを行いました。

参加した学生からは、「他大学の学生、そして将来ともに働く仲間と出会えて良かった」「地域で働くことを修学資金の制限と考えるのではなく、良い面について考える良い機会になった」「自分たちの先を行く先輩の話がとても参考になった」といった声が聞かれました。来春にはスプリングセミナーも予定していますので、今回参加できなかった修学生の皆さんもぜひご参加ください。



茨城県からのお知らせ

茨城県地域枠入学試験に係る県面接及び修学資金貸与のご案内

将来、知事が指定する医療機関において、医師の業務に従事しようという意思のもと、茨城県地域枠で以下の5つの大学の医学部に入学された方に対して「茨城県地域医療医師修学資金」を貸与します。

大学の地域枠入学試験を受験する前に、茨城県が実施する修学資金貸与のための面接を必ず受けていただきます。

※知事が指定する医療機関は「医師不足地域の医療機関」または「医師不足地域以外の地域において中核的な役割を担う医療機関」の中から従事する医療機関を個別に指定します。

受験資格

次のいずれかに該当する者（その他受験資格については各大学のホームページでご確認ください）

- (1) 県内の高等学校等を卒業した者
- (2) 県内に居住する者の子

※平成25年4月に茨城県地域枠入学者として入学した後、修学資金貸与のための契約を締結します。

貸与金額 月額150,000円

地域枠定員（貸与人数）

筑波大学	11名	東京医科大学	8名
東京医科歯科大学	2名	杏林大学	2名
日本医科大学	2名		

※日本医科大学は「地域医療医師修学資金貸与制度枠」として設置しています。

県の面接

筑波大学・東京医科大学

実施場所 茨城県庁11階会議室
出願期間 平成24年10月1日（月）から10月10日（水）まで（当日必着）
面接日 平成24年10月20日（土）または10月21日（日）

東京医科歯科大学・杏林大学・日本医科大学

実施場所 茨城県庁11階会議室
出願期間 平成24年11月5日（月）から11月14日（水）まで（当日必着）
面接日 平成24年11月24日（土）または11月25日（日）

茨城県地域医療支援センター

茨城県水戸市笠原町978番6（保健福祉部医療対策課内）TEL:029(301)3191

<http://www.pref.ibaraki.jp/bukyoku/hoken/isei/ishikakuho/top/index.html> E-mail:i.doctor@pref.ibaraki.lg.jp